石川・堅田（かただ）B遺跡

1　所在地　石川県金沢市堅田町
2　調査期間　第四次調査　一九九九年（平11）八月～一〇月
3　発掘機関　金沢市教育委員会
4　調査担当者　向井裕知
5　遺跡の種類　居館跡
6　遺跡の年代　鎌倉時代、室町時代
7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

堅田B遺跡は金沢市北東部を流れる森下（もりもと）川の河岸段丘上に立地する。遺跡の北側には「堅田城」（標高一三三m）があり、木曽義仲が築城したと伝わるが、現在は一向一揆衆の山城の形態を留めている。南側には加賀と越中を結ぶ、近世に「小原越（おはらごえ）（道）」と呼ばれた道を一部踏襲する国道三〇四号線が走る。

（金　沢）

本遺跡の調査は国道八号線バイパス建設に伴うものであり、一九九六年度調査～一九九九年度調査で現地調査は終了した。

遺跡の性格としては、大型掘立総柱建物（最大棟は五間×一〇間・約二二七㎡）や堀（幅約五m深さ約〇・八m）の存在、また梅瓶、酒会壺などの中国産高級陶磁器や漆器絵皿、大量の土師器皿、乗馬鞍、鏑の出土などから有力武士の館跡と考えられる。

堀は北堀で七〇m以上、西堀は九〇m以上を確認しており、南は「小原越（道）」まで延びると想定するとほぼ一町程度になる。本誌第二〇号・二一号に述べたように、西堀は一三世紀後半にSD〇一が埋めたてられて一部改変されており、北堀SD一一も詳細な検討はこれからだが、同じ一三世紀後半頃に一度埋められ、再掘削された可能性が考えられる。堀を最終的に廃棄した年代は、北堀覆土の上層で出土した土師器皿や完形の珠洲焼すり鉢から、一四世紀後半と考えられる。なお、一五世紀の遺物も出土しており、堀廃棄後にも遺跡は存続する。

なお、第四次調査は館の南側約三分の一程度を発掘した。

本遺跡からは多くの木製品が出土しており、大部分は堀からの出土である。木簡については、第三次調査以前出土分は本誌第二〇・二一号に紹介している。今回報告する木簡も堀（西堀SD一一）から出土したものであり（遺構図参照）、一四世紀後半の堀を廃棄する際に入り込んだものと考えられる。

8　木簡の釈文・内容

(1)　「奉転読大般□□羅密多経一部六百巻」　415×80×6　011

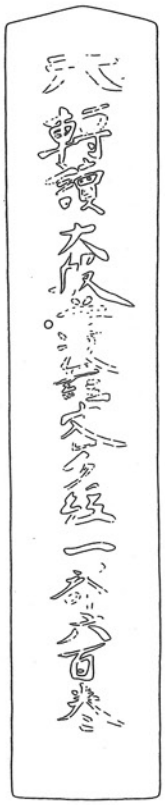
上部は圭頭形に成形し、左右、下部は直線的に仕上げている。墨痕は消滅しているが、墨のあった箇所が浮き上がっているため判読できる。一定の期間外気に触れ、墨のある箇所のみが周辺よりも風化を免れた結果であろう。本誌第二〇号に紹介した巻数板も、同様の状態で出土している。また、体部中程に径五㎜程の穿孔があるが、一定の期間外気に触れていたと考えると、何かに打ち付けられていた痕跡の可能性が考えられる。

9　関係文献

金沢市埋蔵文化財センター『堅田B遺跡発掘調査概報』（一九九九年）

（向井裕知）

遺構図（1:1000，第1～4次調査分）



S＝1/4